令和４年度　第２回白馬高等学校学校運営協議会　議事録（概要）

１　日　時　　令和４年（2022 年）８月 29 日（月）９時 30 分～11 時 30 分

２　場　所　　本校体育館

３　参加者　　委員 13 名（欠席：白戸洋会長）
この他、長野県教育委員会より２名
（高校再編推進室主幹指導主事　山岸　明 氏）
（　　同　　主任指導主事　有坂清明 氏）
白馬・小谷村関係者４名
白馬山麓事務組合白馬高校支援係２名
白馬高校魅力化コーディネーター
白馬高等学校職員３名

４　次　第

（１）　開会の言葉（井出教頭）

（２）　長野県教育委員会挨拶（山岸高校再編推進室主幹指導主事）
〇今回新たに５名の委員をお迎えした。増員の経緯については議事の中で触れたい。
〇十分な感染対策を講じての開催となっている。各委員におかれても十分ご留意いただきたい。

（３）　学校長挨拶（関校長）
〇前回会議でグループ討議を行い、白戸会長や前白馬村長の下川委員からも好評をいただいた。本日のグループ討議も活発な議論となることを期待している。忌憚のないご意見をいただきたい。
〇協議会規則第 12 条２で「情報提供に努める」とあるが、これまでホームページに議事録を掲載しているものの、その他の面ではやや不十分だったと感じている。各委員の所属団体等を通じて地域の方々に本協議会の熱量や思い、実際の議論の様子をぜひ伝えて欲しい。白馬高校は地域の強い期待に支えられている。

（４）　委員増員にともなう新体制について
＜山岸主幹指導主事＞
〇第１回会議において、近年の入学者数の減少等を踏まえて、白馬高校が引き続き地域の学校として存続するためには、さまざまな立場の方から幅広く意見を聴取する必要があると、協議会としての課題提起があった。これを受けて７月の県教育委員会定例会で、規則の第２条にある委員定数を「15 名以内」で組織すると改正した。このたび、地域から両村議会の代表者、白馬山麓事務組合の代表者、以前から要望があった白馬中学校校長、そして新たに就任された白馬村長の５名を本日委嘱した。

（５）　委員の自己紹介

（６）　審議事項
＜井出教頭＞
〇本日は白戸会長が欠席のため、武田副会長に議長をお願いする。

① 外部評価について（白馬山麓事務組合）
＜武田副会長＞
〇はじめに、事務組合から総合戦略および地方創生推進交付金の使用状況に関する外部評価について説明をお願いする。
＜松澤委員＞
〇事務局長としての立場から説明する。令和２年度に行った島根県視察の結果を受けて、令和３年度から、島根県を中心とする「高校を核とした新たな人づくり・人の流れづくりプロジェクト」

に加わり、白馬山麓事務組合として基本目標と重要業績評価指標 KPI を含む総合戦略を策定し、広域連携事業として令和３年度から令和６年度まで４年間、地方創生推進交付金を受けることになっている。今回、令和３年度の事業に対して事務局が行った評価の妥当性を学校運営協議会委員の皆様に検証していただき、総合戦略の着実な実施につなげたい。

＜中村事務局長補佐＞

〇総合戦略については別資料の通り。それを踏まえたうえで事業評価をお願いしたい。

〇事業内容、事業効果、事業効率それぞれについて評価をお願いしたい。(※評価方法について説明)

＜武田副会長＞

〇事務局からの説明について、質問、意見はあるか。

＜浅原委員＞

〇本年度から新たに委員となった者には昨年度の状況がわからない。事業効果や効率の評価について、これまでの取り組みや関わりを経済的な部分だけではなく、魅力づくりと学校存続についての資料を提示して欲しい。

＜富原委員＞

〇白馬高校が存続できるための目標値ではなく、中学生が白馬高校を選択する理由、学校生活が楽しくなる工夫や魅力づくりに対する目標値について検討して欲しい。

＜中村事務局長補佐＞

〇委員の皆様からのご要望を踏まえ、あらためて資料を送付する。ご協力をお願いしたい。

② 生徒募集活動について

＜武田副会長＞

〇第１回の協議会では、本協議会が主体性と責任感をもって白馬高校の課題解決に向けた取り組みを検討し、学校とともに進めていくことが確認され、それに向けて委員相互に意見交換を行った。本日もグループ別で意見交換の場を設けるので、前向きで具体性のある発言をお願いしたい。

〇白馬高校の喫緊の課題は、高校再編基準該当を回避するための生徒募集強化と、そのための更なる学校の魅力化にある。このうち、生徒募集強化については、第１回協議会で学校から、来年度・再来年度における入学者数の目標と、それに向けた取り組みが提案され承認されている。

〇ここでは、はじめに学校から募集活動の現況についてお話いただき、それを踏まえて委員の皆さんから意見や提案を受けたい。

＜関校長＞

〇地元中学校に対する説明会は、これから実施するところもあるが、その多くはすでに実施済みである。生徒による説明動画を活用し、本校の特色ある授業や本校で取り組めることを紹介している。白馬中・小谷中については、同行した本校生徒が高校生活での取り組みについて紹介し、中学生に対して「一緒に学ぼう」と呼びかけた。

〇地元保護者対象の学校説明懇談会は、保護者の皆さんに白馬高校の現況を正しく理解していただくための機会として計画している。白馬・小谷両中学校を訪問する予定である。白馬高校に対しての期待や要望を伺う機会でもあり、ぜひ本協議会委員にも出席をお願いしたい。

〇県外向け説明会・個別相談会は、東京・名古屋・大阪地区において対面で開催する。さらに、地域みらい留学を通じたオンライン・対面による説明会を実施しており、参加校の中では視聴参加率が高い方である。

〇昨年中止になってしまった体験入学を今年度は実施できた。参加者もほぼコロナ禍前の水準に戻った。アンケートでは、白馬高校を知った理由として、本校ホームページや中学校の先生からの情報提供という回答が多かった。県外参加者の回答から、「地域みらい留学」から情報を入手していることが確認できており、県外に向けた情報発信については一定の効果が見られる。参加動機を尋ねる問いで、「スキー競技の継続」という回答が多かったのは嬉しい。どちらの学科に興味があるかという問いでは、国際観光科への関心が高かった。詳細は、資料冊子の最後に掲載しているのでご確認いただきたい。

〇スキー部の活性化は本校にとって重要事項であり、中学校での説明会では必ず触れている。公立学校としてスカウト的な個別の生徒勧誘はできないが、スキー部 OB 会、後援会、保護者会などの協力を得ながら練習環境や指導体制についての周知を図りたい。

〇最後に、学校としてお願いしたいことをあげた。ぜひ協力をお願いしたい。

・保護者向け説明会、懇談会への協議会委員や同窓会、PTA 関係者などの出席

・都市部、特に大阪地区における募集強化のための情報収集と募集活動

・学校PR動画の制作とその活用に係る支援
・スキー部生徒の勧誘に地元スキークラブ、OB 会などの協力、県内外高校との差別化を図るための支援策の検討
・県外生徒確保に向けた情報発信の効果的な方法の提案

〇これはまだ検討段階だが、地元サッカーチーム「アラグランデ」との連携も話題として挙がっている。

＜武田副会長＞

〇学校からの説明について、質問、意見はあるか。

＜丸山委員＞

〇体験入学参加者のアンケートについて、「入学したいと思うか」を尋ねる問いがある。回答する選択肢の内容をさらに明確に分類できると良い。

＜関校長＞

〇検討する。

（7）　意見交換

＜武田副会長＞

〇ここからグループ討議に移る。これからすぐにやらなければならないこと、この後の２年間でやるべきこと、今後時間をかけて検討していくことを明確にしながら、グループ討議してほしい。その後、各グループから報告し内容を全体で共有したい。Ｂグループは武田、Ａグループは関校長の進行でお願いする。委員以外の方もグループに入り発言いただいて構わない。

Ａグループ　（相沢・柴田・草本・笹川・出口・丸山・関）

＜関校長＞

〇先ほどの話を受けて、質問を含めて意見を出していただきたい。

＜出口委員＞

〇スキー関係では、公立の良さを打ち出したいという話だが、私立高校は学校行事に参加せずに遠征や合宿を行い、授業の出席についても配慮されていると聞く。白馬高校では、普通の高校生活を他の生徒と楽しみながらできる点をアピールしたらどうか。

＜関校長＞

〇保護者からすると、高額の遠征費の負担がないことは確かに魅力となる。白馬高校としては、公立の良さ、練習環境、指導体制、そして何より白馬の良さをアピールしたい。

＜笹川委員＞

〇スキー部はお金がかかることを覚悟で入部させなければならない実状がある。親によってはスキーにかける熱量や経済的事情が異なることを関係者は認識しなければならない。「白馬村スキークラブ」が地域のスキー活動をどの程度バックアップできるのか、しっかり示していく必要がある。

〇県外、県内他地区から来る生徒は、スキーをやりたいと言っても漠然としていて、目指しているものが異なる。白馬高校のスキー部が世界を目指す活動をしていることを知らずに、入学して初めて現状を知ることがあるため、もう少し丁寧に説明する必要がある。

＜関校長＞

〇スキーの愛好者から競技スキーのトップレベルまで幅広く受け入れられるようにしたい。トップレベルを目指す生徒には更なる支援を、スキーを楽しみたい生徒に対しては白馬スキークラブと連携した受け皿を提供できないか、白馬山麓事務組合と検討を進めたい。

＜相沢委員＞

〇白馬高校の生徒に対するスキーリフト券の費用はどのようになっているか。

＜関校長＞

〇白馬村索道協議会の支援を受けて、スキー部だけでなく一般の生徒も優遇していただいている。

＜相沢委員＞

〇スキー人口が減っている中、白馬高校の生徒が利用することでスキー場の活性化につながる。白馬村に限らず北アルプスどこのスキー場でも利用できるよう支援していただくと一つの魅力にもつながるのではないか。

＜関校長＞

〇ご指摘の通りだと思う。

＜相沢委員＞

○話題は変わるが、山岳部の生徒に限らず、授業や山小屋等のアルバイトを通じて全校生徒が山の知識を身につけ、山の魅力が話せるようになれば、白馬や小谷に住みたいという気持ちにもつながるのではないか。山を魅力化につなげたい。

＜関校長＞

○山の魅力も大切だと認識している。４月から山岳専門の先生が赴任し、山岳部の活動が増えた。また今年度から１年次の学校設定科目として「北アルプス学」を設置した。地元の方の話を聞いたり現地実習を行ったりして、地域の魅力を理解できるように努めている。

＜柴田委員＞

○スキーは白馬・小谷にとって欠かせない。必要があればスキー部に指導員をつけるなど支援をして、白馬高校にさらに多くの選手を入れる思いで取り組んで欲しい。

○山岳や環境に特化した取り組みをアピールすることも良い。

○四国・中国地方の視察を行った際、山間部の多くの学校で小中高の連携があった。今後の検討課題として欲しい。

○県外生が卒業後、白馬や小谷に目を向ける動機づくりが今後さらに必要。

○国際観光科にこだわらず、原点に立ちかえり、検討する時期に来ているのではないか。

＜笹川委員＞

○山岳観光にも恵まれた環境は強みになる部分だ。国際観光科として、フランスなどのアルプス地域との提携などもできないか。山の仕事の分野も全国から集められる魅力のひとつになると思う。

＜関校長＞

○スキーと山岳や国際を組み合わせた魅力づくりについて参考にしたい。

＜出口委員＞

○アラグランデとのサッカー連携は有意義である。将来的に白馬高校で高体連のサッカーの大会に出場できると良い。さらに、女子サッカーは県内の上位はすべてが私立高校なので、白馬に行ってサッカーをやりたいという女子が出てくればなお良い。

○中学校の教員として多くの地域に赴任したが、不登校生徒などに優しく学び直しができる学校に需要があり、私立通信制高校の人気が高い。そのような学校が大北地域にあっても良い。

＜関校長＞

○学校というのは社会の縮図ともいえるわけで、さまざまな生徒がいて良い。中には不登校や対人関係をうまく築けない生徒もいるが、彼らに刺激を与えながら、集団生活ができるようにすることはどこの高校でも必要なこと。手厚く指導できることは学校の魅力となるが、一方で先生の負担が大きくなる。村費などで支援の先生を雇っていただくことも、先のことを考える上では必要。

＜出口委員＞

○各中学校に説明に行く際に、このようなことを話題にしていただけると、中学校側から相談が相次ぐことが予想される。

＜柴田委員＞

○寮運営を行う上でも、さまざまな生徒に対して具体的な支援を検討して行かなければならないが、実現に至っていない。学校敷地内に寮があると、先生方の指導が入りやすくなり、さらに連携して支援できる。四国・九州地方にある寮は、先生方が宿直を担当するところもあった。親元を離れ、環境を変えて白馬に行けば改善できるという考えで、親や本人が転地療養的にとらえて生活環境を移すということだと寮運営が疲弊してしまう。

○同窓会やスキー部のバスが大変老朽化しているが、両団体とも財政見通しは立たず、バスの更新は喫緊の課題。村の支援はできないものか。

＜笹川委員＞

○しろうま祭で地域展を企画し、国内外で活躍している卒業生 40 名近くから在校生へのメッセージをいただいた。白馬高校への思いはあるが、白馬高校の現状を知らない方が多く、情報を提供することが大切だと感じた。

○スキー部の OB 会でも情報共有したい。村、学校、地域、保護者で、情報を交わす場を作れるよう今後動きたい。

＜関校長＞

○周りには学校に協力したいという人が沢山いるという話を聞き力強く感じた。そういう場をぜひ作りたいと思っている。小中学校の先生方や保護者、同窓生の皆さんと白馬高校のことを話すなかで学校が頑張っている現況を知っていただいたり、提案や意見を出しあったりすることは重要。

○PR 動画を制作することになっているが、完成したら同窓生の著名人にお願いして情報を拡散して

もらい、ネット上でも多くの人が白馬高校に出会う機会を創出したい。

＜草本委員＞

〇体験入学のアンケートを見ると、７割以上の中学生が参加を自分で決めたとある。動画も中学生向けの見せ方をすることが大事だ。実際、生徒が親を説得して入学を決めているケースが多い。

〇国際的な学びや観光分野に興味があるというデータに驚いた。今の保護者世代は、白馬高校に対してスキー部以外には良い印象がなかったという時代。白馬高校がどんな学校だったら行きたいと思うのか、アンケート調査を行い、注力すべき点を見極めることも必要。

〇ブリティッシュスクールイン東京のホームステイプログラムはコロナ禍で中断しているが、再開したい。特徴のひとつとして大きく取り上げ、スキーや山岳について再度大きく発信するなど、できる事が多くあるが、これもアンケート調査を行うことで戦略が立てやすくなるのではないか。

＜関校長＞

〇今年で７年目。コロナ禍を含め社会情勢の変化も著しい。地元の皆さんがどのような考えをお持ちか調べることには意義があると思う。調査項目や調査対象について具体的に協議会で決めていただき実施をお願いしたい。

＜笹川委員＞

〇白馬高校の保護者の意見からすると、保護者でいる間が一番この問題に関心があるため、秋にPTAで話し合う場を持ちたい。

＜関校長＞

〇ぜひお願いしたい。同窓会ではしろうま祭や体験入学の案内を新聞広告として掲載していただいている。また、今後、同窓会報の形で折り込み広告に入れていただく予定もある。委員の皆様には、さまざまな所で本校の情報に触れられる環境を提供していただきたい。

Ｂグループ　（武田・太田・富原・浅原・中村・松澤）

＜武田副会長＞

〇先ほどの関校長の話を受け、地域における白馬高校の役割や中学生や保護者の期待・希望などをどのように学校運営に活かしていくのか、具体的な提案を含めて意見交換していただきたい。

＜浅原委員＞

〇「学校としてお願いしたいこと」については、PR 動画が有効に働けばよいと考えている。スキー部の勧誘も大事だ。これほど魅力的な環境にありながら、白馬中の生徒でも他所へ行ってしまう。サッカーを続ける生徒はみな県外へ出てしまうので、サッカー連携の話はとても魅力がある。

〇白馬中の生徒の進路先は、白馬高校への進学が全体の３分の１人弱である。進学校と言われる高校を希望する３分の１以上の生徒を白馬高校へ向かわせることは困難である。残りの３分の１の生徒たちを白馬高校にどのように向けさせるかが課題となる。高校生ホテルをはじめ魅力的な教育活動を行っているが、時間の経過とともに魅力は薄れ形骸化する。今までの良さをそのまま継続させるだけでなく、一度壊して作り替えるほどのエネルギーが必要。一人一人の進路は大事なので、白馬高校の魅力を再構成すれば、迷いながら他校を考えている生徒が目を向けるのではないか。「学校としてお願いしたいこと」にあげられる項目と同時に、魅力づくりを再構成していかなければならない。

＜富原委員＞

〇そもそも「公立高校として白馬高校を残す」とは、どのようなことを意味するのか。

＜松澤委員＞

〇地域として白馬高校を支えようという話は、高校がなくなると地域が衰退していくので、両村が支えて残していこうという地域案がもとになっている。

＜富原委員＞

〇従業員に白馬移住を勧めた場合、将来的に結婚出産を考えると、幼小中はあっても高校がないと子育てができないため、地域に高校があることの必要性を感じている。一方で、私立通信高校が２万人以上の生徒を集め、オンライン授業を活用しながら高校卒業の資格が取れるという。例えば白馬高校が私立通信高校の傘下に入れば、毎日授業に出なくてもよくなり、思い切りスキー部の活動ができ、それぞれの好きなことができるようになるが、実現できることであるのか。

＜中村委員＞

〇私の立場から回答はできないが、地域に学校があることが大事。子どもたちが地域を守り、いずれは地域にもどってくることにつながると考える。今の時点で公立高校が私立に転換していくことは容認できない。オンライン授業は公立でもできるかも知れないが、別のモデルとして白馬高

校はこういう学校だと提案していかなければならない。現時点で地元中学から多くの生徒が入学したとしても、20 年後、30 年後は全体的な人口減少が明確であり、生徒数自体が少なくなる。その中で魅力的なものを発信し存続していくことが大事。それが国際観光科では魅力が不足とか、オンラインを取り入れたいという余地があるなら、教育委員会と話していけば良い。考え方は良いと思うが、公立高校を私立にするという話にはならない。

＜富原委員＞

〇公立として残るメリット、私立との違いについてはいかがか。

＜中村委員＞

〇公立高校であれば、県が運営や予算、先生の採用や異動などすべてをみる。

＜山岸主幹指導主事＞

〇高校の姿は多様化しており、通信制も増えている。長野県教育委員会としても長野市や松本市にそのような学校を整備する動きはあるが、白馬高校は通常の全日制の公立高校と考えている。メリットとすると、全ての子どもたちに出来るだけ平等な教育を担保するのが公立高校の役割。その大前提の中で学校を特色化していくということだ。

＜武田副会長＞

〇公立高校のなかで通信（オンライン）を加えて、平行して行うことはできないのか。

＜山岸主幹指導主事＞

〇例えば学校が小さくなると教員の配当数が減る。理科だけで物理・化学・生物・地学と４科目もあって専門の先生方の配置が難しくなる。県はできるだけ小さな学校に対しても配置をしているが、限界がある。私立高校はそれなりの自由度があるが、公立高校には私立ほどの自由はきかない。あくまでも個人的にはそう思う。

〇公立ではオンラインの授業はできるが、オンラインを受ける側で指導できる教師がいないと認められないという制限がある。有名塾のように見るだけで授業を受けたことにはならない。あくまでも生徒と教員が対峙することが大切で、授業だけでなく人間づくりをあわせて行っている。

＜武田副会長＞

〇甲子園優勝校の監督がインタビューで「青春は密」と言っていた。地域の人たちから支援を受け、地域の中に子どもが入っていくという、白馬高校の特色と言える教育活動においても、地域の方との密な関係がある。コロナ禍で制限される部分もあるが、この関係性を白馬高校が公立として存続する道につなげたい。

〇国際観光科設立当初、「自分は長野を出たことはないが、同じクラスに他県出身の生徒が複数いるので、実際に行かなくても地域性や食文化について会話ができ学べる」と話す生徒がいた。多様な生徒同士のつながりが相乗効果をもたらすために、どのようにしたら多くの県外生に来てもらえるか考えていく。一方、県外生に頼るばかりでなく、地元においては、これから先も長いスパンで小中学校が白馬高校と交流し、小さいころから白馬高校を知り特色ある教育が根付くよう育てていくことが大切。

〇今だけ人を集めればよいというものではなく、今後継続して一定数を確保するために、白馬高校に行きたいと思う魅力あるものとは何か考えていく。前回協議会で話題になった英語教育の特徴を理解しないと、英語嫌いな子は入学しなくなるという例に代表されるように、教育内容の伝え方を工夫することに加え、これまでと異なる魅力も創造していかなければならない。

＜中村委員＞

〇白馬高校の存続を考えた時、早急に行わなければならないことは生徒数を増やすことだ。その後、保幼小中高一貫という考え方で長期的にやっていく必要がある。いかに白馬高校と関わるか、それが長期的な考え方につながる。すぐにできることは、動画を使ったアピールであり、その中で公営塾では学力をつけて大学進学できる指導があることも知らせるべき。迷っている人に対して、「それならば白馬へ行けばできる」とすぐにでも訴えなければならない。

〇小谷村で総合教育会議を開催した際、白馬・小谷の中で今白馬高校を「スキー」という形で選択することは、かなり数が限られてくるという話が出た。これから先はスキーでないものを考える必要がある。教育活動の中で生きた社会体験ができるということの方が強い。

＜太田委員＞

〇議員をはじめた時から白馬高校の存続問題が出ていた。高校がなくなると、白馬・小谷の衰退が目に見え、大糸線の存続に関わることも懸念され存続を訴えてきた。以前、高校再編基準に抵触した際、両村の熱意を県に認めてもらい、全国募集の学科を設けて存続した。初めは、全校生徒が 200 人を超えたが、そこから生徒数が減ってきた。実際にコロナの影響もあったがこの原因に

ついてしっかり検証すべき。同様に寮の運営に大金をかけているが、そこまで必要かという点も検証すべき。白馬中学では、多くの生徒が電車代を払い他地区の高校へ通学している。白馬高校でよい教育が受けられることが知られていない。保護者への説明に加え、生徒たち自身がそれを知ることが大切。また、アルペン・クロス・ジャンプの生徒が、練習環境が整っているのも関わらず、他校へ進学しているのはなぜかを検証してみる必要がある。

＜武田副会長＞

〇学校からのお願いの中に「中学校への説明会への参加」とあるが、これは大事なこと。学校の先生以外の人も関わっているということをぜひ知ってもらいたい。

＜浅原委員＞

〇本校で７月の行われた白馬高校の説明会に、白馬中出身の高校生が３名来校し中学生に対して自らの経験をもとに話をした。おそらくこの話を聞いただけで白馬高校へ行きたいと考える中学生が数人は増えたのではないか。先生でなく高校生が直接語りかける姿は魅力的だった。

＜太田委員＞

〇生徒たちが、自分の学校を説明しに行くというのはとても大事。基本的な所は先生方が話して、感情的なところを保護者が話すというのも良いのではないか。

＜浅原委員＞

〇文化祭のポスターを持ってきた白馬高校の生徒に、宣伝を放送で呼びかけたらどうかと声をかけた。後日、再度高校生３名が来て校内放送で文化祭のPRを行った。

＜太田委員＞

〇以前、ユーテレに協力いただき、白馬高校と白馬中学校でチャンネルを作る試みを一時期行ったことがあった。放送に興味がある子は少なからずいて、出演することに興味がある子、機材操作に興味がある子がそれぞれ担当した。継続して取り組むことで、放送コンクールへの出場を視野に入れた活動ができるのではないか。

＜中村委員＞

〇白馬高校を卒業した同窓生たちが、白馬高校を大事に思う姿を今以上に外部に表して欲しい。白馬高校で過ごした充実した日々について一生懸命発信してもらいたい。

＜武田副会長＞

〇時間が来たが、今すぐやらなければならないことは、まずは動画づくりと委員の説明会への参加ということで良いか。

＜松澤委員＞

〇動画作成の予算について、現時点では議会で可決されていないが、中学生向けにTicTok形式で15秒ものを数本、保護者向けに１分、５分程度の動画作成を考えている。また、小谷中学校と環境の授業で一緒に学習しており、その様子を放映することも計画中だ。

＜太田委員＞

〇ユーテレで高校の番組を作ろうという話はどうなったか。

＜松澤委員＞

〇まだ番組制作まではできていない。

〇地域みらい留学のオンライン説明会は生徒たちが行っているが、大人の説明に比べて視聴者の反応が良い。

＜武田副会長＞

〇ぜひ今後も新しい感覚で意見や提案をお願いしたい。

グループごとのまとめ

＜武田副会長＞

〇時間となったので、全体会を再開したい。

〇グループ内で出された意見を発表し共有したい。

＜関校長＞＜武田委員＞からそれぞれ分科会のまとめ

＜武田副会長＞

〇グループ討議で出された意見から、動画の作成、保護者向け説明会への参加、同窓会、PTAとの連携など、すぐに実施できることの確認ができた。実施可能な内容についてはすぐに取り組んでいただき、次回協議会で報告をお願いしたい。

（7）閉会

＜井出教頭＞

〇今後の運営協議会は第３回を 11 月７日（月）に、第４回を２月 13 日（月）に開催したい。

以上